

『厚生新編』にみる蘭学音訳語とその漢字選択

徐 克偉

要旨：今日の研究では、日中における語彙交流の意識語を中心に大きな成果をあげている。しかし、その一部としての音訳研究は、外国地名、個別の人名が中心であり、その範囲も幕末以降に限定されていると思われる。よって本稿では、江戸幕府の翻訳事業の成果である『厚生新編』（1811-45）を通じて、蘭学における音訳語、特に漢字表記の音訳語を考察し、漢訳が継承・発展する軌跡を遡ってみたい。それにより継承された音訳語の範囲、新しい音訳語の創出方法、あるいはその基準としての唐音、杭州音に触れてみたい。

キーワード：『厚生新編』、蘭学、音訳語、漢字表記、唐音、杭州音

0 はじめに

『厚生新編』は、江戸幕府の翻訳事業として、1811年から1845年の間にオランダ語から日本語に翻訳された西洋百科全書であり、江戸時代の重要な蘭学文献の一つである。訳語の不可欠の一部分としての音訳語が多く見られるが、興味深い点は、漢字音表記の訳語が存在している。調べてみると、『厚生新編』及び他の蘭学文献に収録される漢字音訳語は、すべてが蘭学者によって創出されたものではなく、漢籍、殊に明末清初における漢訳西書からの訳語が多い。

従来の研究では、殊に明清における漢訳西書の関連研究を手掛かりに、宣教師などの来華西洋人の手による訳語が日本語へ及ぼした影響について、特に学術用語をめぐった意識語を中心に様々な成果が遂げられる。¹但し、管見の限り音訳語の研究はさほど見られず、地名、人名などの外国固有名詞に限られているといえる。州名、国名をはじめ、多くの漢訳語の受容・改造が区別されたものの、新訳語についての探究が少ないのは惜しまれる。²甚だしきに至っては、

¹ 荒川清秀（1997）『近代日中学術用語の形成と伝播：地理学用語を中心に』、東京：白帝社。孫建軍（2003）『日本語彙の近代：幕末維新时期新漢語の成立に見られた漢訳洋書の影響』、国際基督教大学大学院比較文化研究科博士論文。同前（2015）『近代日本語の起源：幕末明治初期につくられた新漢語』、東京：早稲田大学出版部。Masini, Federico. (1993). *The Formation of Modern Chinese Lexicon and Its Evolution toward a National Language: The Period from 1840 to 1898*, the Monograph No. 6 of the *Journal of Chinese Linguistics*. Liu, Lydia H. (1995). *Translingual Practice: Literature, National Culture, and Translated Modernity--China, 1900-1937*, Stanford: Stanford University Press.

² 王敏東（1992）「外国地名の漢字表記をめぐって：『オーストラリア』を中心に」、『待兼山論叢・文学篇』第26号、17-39頁；同前（1992）「外国地名の漢字表記について、『アフリカ』を中心に」、『語文』第58輯、12-33頁；同前（1994）『外国地名の漢字表記についての通時的研

漢字音訳の不正確、不統一などの理由で、固有名詞の漢字訳は日本の教育の発達を阻み、長きにわたって日本人を漢字の重圧下に苦しめる罪があると論じ、漢字音訳を徹底的に全否定した意見もある。³

中村久四郎は近世における中国伝来西洋語漢字音訳語を最も早くから考察し、一部の語彙の受容過程を究明したが、そのルートや方法などには言及していない。⁴その後、個別の研究者は、蘭学者が唐音や杭州音などに従い、新しい音訳語を創出していた、ということを明らかにするが、いわゆる唐音、杭州音の内容までは追究しなかった。⁵また、沈国威は『解体新書』、『重訂解体新書』などの音訳語とその行方を検討し、音訳語を利用した原因（概念の欠如・理解の難しさ、人名などの固有名詞、仏典五不翻の「此無故」の影響）及びその特徴（専用の漢字表記を以て、字義の影響を回避すること；中国典籍にみる音訳語を尊重すること）を明らかにした。⁶千葉謙悟は音訳研究を取り入れるが、主に19世紀中葉以降における中国語及び日本からの影響に関心を配り、それ以前に成立した蘭学の音訳については考察をおこなっていない。⁷

、総合的にいえば、今日の研究では音訳語問題は触れていないわけではないが、明らかにされていない点が多い。従って、本稿は『厚生新編』を手掛かりにして、蘭学の漢字音訳問題を考察することで、そのメカニズム、即ち漢字訳の受容と新語の創製とを探ってみたい。

1 『厚生新編』にみる音訳語の実態

表記形態からみれば、『厚生新編』にみる音訳語は、仮名訳と漢音訳と、二種類からなっている。

究』、大阪大学文学研究科博士論文；孫建軍（2004）「『ロシア』という漢字表記の成立」、飛田良文 他編『アジアにおける異文化交流』、東京：明治書院、84-98頁。また、注1で言及した孫建軍の著作では「英国」、「米国」など、音・意結合で訳出された語彙についても詳しく論じられる。

³ 能美徹（1961）「外国固有名詞の漢字音訳について」、『北九州大学開学十五周年記念論文集』（外国文学・語学篇）、279-97頁。

⁴ 中村久四郎（1928）『支那語中の西洋語：近世支那傳來西洋語漢字音譯語彙』（東亞研究講座第二十輯）。

⁵ 板沢武雄（1958）「蘭学発達の基盤及び契機としての漢学」、『法政史学』第11号、2頁；杉本つとむ（1998）『杉本つとむ著作選集2：近代日本語の成立と発展』、東京：八坂書房、351頁；吉野政治（2014）「蘭書三訳法の起源とその名称」、『同志社女子大学日本語日本文学』第26号、48-50頁。

⁶ 沈国威（2010）《近代中日词汇交流研究：汉字新词的创制、受容与共享》、北京：中华书局、82-85頁。

⁷ 千葉謙悟（2010）『中国語における東西言語文化交流：近代翻訳語の創造と伝播』、東京：株式会社三省堂、52-140頁。また、蘭学の音訳問題については、岡田袈裟男の研究（1978）「『和蘭字彙』とその音訳語の考察」、『国文学研究』第64巻、83-93頁、などを参照。

1.1 仮名音訳語

訳稿を読み流し、項目名は意識でなければ、音訳、特に仮名訳で記されること分かる。例えば、第一巻（馬場佐十郎訳、大槻玄沢校）には、以下の仮名訳の項目名が見られる。⁸

- 3 アールス・フート[Aarsvoet]（羅匈語キリストテユス [Christatus]と云和漢の名未詳）
- 4 アルバトロス [Albatross]（羅匈語エキシユランス [Exulans] といふ和漢の名未詳）
- 5 アルク[Alk]（羅匈語トルタ[Torda]と云是亦和漢名未詳）
- 6 アリュコ[Aluco]（和漢名未詳可追考）
- 7 アンヒンカ [Anhinga]（和漢の名未詳可追考）
- 8 アニ [Ani]（和漢名未詳可追考）
- 9 アンチーケカペル[Antieke Kapel]（蛾蝶の一種和漢名可追考）
- 10 アーレントギイル [Arend-gier]（鷺の類羅匈語ペレノプテリユス [Perenopterus]といふ）
- 11 アウレリヤ [Aurelia]（蛾蝶の一種和漢名可追考）
- 12 アヽルベシオン [Aalbesien]（羅匈語にてリベシウム [Ribes]と名く）
- 13 アヽルド・ベシイプラント[Aardbesie-platen]（羅匈語にてフラガリア [Fragaria]と名く）
- 15 アヽルドアツペレン[Aardappelen]（一名タルトウヘルス [Tartouffels]・）
- 16 アヽルド・アルテキスコツケン[Aardartischokken]（略）
- 17 アヽルド・アツケルス[Aardakkers]（略）
- 19 アヽルド・アマンデレン[Aardamandelen]（略）

合わせて、15個の仮名訳があるが、音訳の理由は、括弧の内の割注の説明したように、日本語・中国語名は未詳であり、追考すべきである。つまり、項目の内容を通じ、その種類などの情報を得たが、対応した和漢の名称が知らなく、意識名を確定できないので、音訳を作り出したと考えている。江戸蘭学の開創者杉田玄白（1733-1817）の論説を借りると、「譯有三等。一曰翻譯。二曰義譯。三曰直譯。（中略）又如呼曰機里爾キリイル[klier]者。無語可當。無義可解。則譯曰機里爾直譯是也。」⁹ということである。即ち、相応しいことばもなく、原語の意味或いは根拠も理解できない場合には、三番目の方法としての音訳（「直訳」）を採用した。

一方、訳文には数多くの漢字訳が見られる。「葡萄（酒）」（または「蒲桃（酒）」）、「曼陀羅花」のような音訳語或は音訳に基づいた訳語がいち早く訳出され、定着したため取り立てて論じる必要はない。それに対して、他の多くの音訳語を見過ごすべきではないと考える。

⁸ 貞松修蔵編（1937）『厚生新編』、静岡：厚生新編刊行會、13-25頁。ショメール著、大槻玄沢他訳（1978）『厚生新編』（第一冊）、東京：恒和出版、12-48頁。

⁹ 杉田玄白（1774）『解體新書』、東武：須原屋市兵衛、序函巻「凡例」、葉五表。

1.2 漢訳西書以前に知られる漢字音訳語

漢訳西書以前の文献、即ち、伝統的な漢籍にも多くの音訳語が見られ、主に下表のように記されている。

原語	漢訳 (出自)	出典 (年代) ¹⁰
Opium	阿片、鴉片 (Opium) ; 阿芙蓉 (アラビア語 Afyūm)	本草綱目・穀之二・阿芙蓉 (1596)
Duivel s -beet	阿魏 (ペルシア語 Anguzad)	西陽雜俎・木篇・阿魏 (860 頃)
Aloe	蘆会 (ア語 Alua)	諸蕃志・志物・蘆荟 (1225 頃) 本草綱目・木之一・蘆会 (1596)
Areca, Pinang	檳榔 (マレーシア語 Pinang)	文選・上林賦・李善注 (658)
Theriaca	底野迦 (ア語 diryāq)	本草綱目・獸之一・底野迦 (1596) 旧唐書 (945) : 底也伽
Myrrha	没薬 (ア語 Murr、ペ語 Mor)	政和証類本草・没薬 (1116)
Siroop	舍利別	局方發揮 (1347)
Persia	波斯	周書 (636)
India	印度 (Sindhu)	大唐西域記 (646)
Tatar	鞑靼	蒙鞑備録 (1221)
Bengal	榜葛刺 (Bengala)	瀛涯勝覽 (1451)
Java	<small>ジャワ/ヤーハ</small> 爪哇	元文類 卷 41 (1334)
Ceylon	錫蘭 (Silan)	瀛涯勝覽 (1451)
Siam	<small>シヤム</small> 暹羅、邏羅	通鑑統編卷 24 (元代)、瀛涯勝覽 (1451)
Holland	和蘭	皇明象胥録・和蘭 (1629)

研究で指摘されるように、「印度」、「波斯」のような音訳語は中国 (または日本) の周辺にあるか、あるいは古くから日中と交流のあった国名、または自然地名である。¹¹即ち、アジア州の地名であると思われる。但し、西欧に属したオランダの国名「和蘭」という訳語も、今日の調査資料によると、この範囲に含まれると考えられる。上記した『皇明象胥録』が成立した際、宣教師による世界地図、地理書が既に流布しており、「唎蘭」などの漢字表記を使用している。また、薬・植物の音訳語が本草書、歴史書などを通じ日本へ伝来して、『厚生新編』の訳者に受け入れられたという点も確認できる。

¹⁰ ここでは、訳語の初出まで辿るのではなく、できる限り容易に入手可能、あるいは蘭学者の言及する文献を挙げる。

¹¹ 王敏東『外国地名の漢字表記についての通時的研究』、7頁。これらの国名・地名の詳しい考察は9-37頁を参考。

歴史書、本草書などの伝統的な漢籍が輸入されるに伴い、アジアを中心とした地名、薬物名、植物名が蘭学者の視野に入ってきたと考えられる。

1.3 漢訳西書にみられる漢字音訳語

『厚生新編』の時代までに、いわゆる漢訳西書は既に日本へ輸入され、知識人の愛読書となっていた。中でも、マテオ・リッチ（Matteo Ricci, 1552-1610）の『坤輿万国全図』（1602、以下『全図』と略す）やアレーニ（Giulio Aleni, 1582-1649）の『職方外紀』（1623、以下『外紀』）などの地理に関する著作は当時の日本人に大きな影響を与えたと言われる。¹²例えば、新井白石（1657-1725）の『采覧異言』（1713）や『西洋紀聞』（1715）は、『坤輿万国全図』を参考にして完成された作品である。また、『采覧異言』は、大槻玄沢の弟子の一人である山村才助（1770-1807）によって増訂された『訂正増訳采覧異言』（1804）が蘭学者の間で広く利用されていた。

『厚生新編』の記述を調査すると、漢訳西書からの音訳語が多く確認できる。¹³

I 地名

A 州名

オランダ語 英語 ^{蘭学者のフリガナ} 漢訳 及び原語 （出典 他¹⁴）

Azië Asia ^{アジア} 亜細亜 Asia （全図）

Europa (Europe) ^{ヨーロッパ} 欧羅巴 （三才図絵・山海輿地全図）

* 『三才図絵』の本文、『全図』および『外紀』には「欧邏巴」と表記される。

Afrika (Africa) ^{アフリカ} 亜弗利加 （外紀）

* 当時、リビア、チュニスなどの北アフリカを指し、『全図』には「小亜非利加」と表記される。一方、今日のアフリカは「利未亜」（Libya）と称される。

Amerika (America) (南・北) ^{アメリカ} 亜墨利加 （全図）

B 地域・国家・城市名

a アジア

Turkije (Turkey) ^{トルコ/チルクエーン} 都兒格（？外紀：度爾格、度兒格）、都爾格、都兒古

Joden (Judea) ^{ユデア/ヨーデン} 如德亜 （全図）

Arabië (Arabië) 亜刺比亜（外紀。全図：曷刺比亞）、亜臘皮亜（？三才図絵：亜臘皮

¹² この方面について、鮎澤信太郎などの日本人の学者は、詳細な研究を行い、大きな成果を挙げている。詳しくは荒川清秀『近代日中學術用語の形成と伝播：地理学用語を中心に』、23-38頁を参考。

¹³ 以下、主に『全図』と『外紀』との二作品を参考にする。両方にも見られる場合は、『全図』のみを示す。

¹⁴ 英語名がオランダ語名と同一、または漢訳の原語名と英語或はオランダ語と同一の場合には省略する。「他」という部分には、主に『厚生新編』にみる他の訳名を示す。

海、采覽異言：垂臘皮亞)

Medina ^{メヂナ} 默德那 (全図)

Perzië (Persia) ^{ペルシヤ} 百爾西亞 (外紀。全図：波斯)、百爾亞、伯爾西亞

Tatar ^{タルタレイ} 韃而鞞 (外紀)

India 應帝亞 (全図)、印弟亞 (外紀)、印帝亞

Silan 齊狼 Silan (?全図：錫狼)、Ceylon ^{セイロン} 則意蘭 (外紀)

Moluccas (Maluku) ^{マルクキセ} 馬路古 (全図)

b アフリカ

Egypte (Egypt) ^{エグ(イ)アテ(ン)} 厄入多 (外紀)、厄日多 (坤輿図説)

Nile ^{子キ・イル} 泥祿河 (外紀。全図：泥羅河)、泥録河、ニール河

Madagaskar (Madagascar) ^{マダカスカ} 麻打曷斯葛兒 (?全図：仙勞冷祖島 一名麻打曷失葛) マダカスカル、麻打曷矢昌兒、麻打曷斯加兒、麻打曷斯葛兒

c ヨーロッパ

Greenland 臥兒蘭德・的亞 (全図：臥蘭的亞大州)、^{グリーンランド} 蒼頭國 (? グリーンランド

Noorwegen (Norway) ^{ノールドウエゲン} 諾尔勿入亞 Norvegia (?全図：諾尔物入亞)、^{ノルウエゲン} 諾爾勿入亞、

^{ノールウエゲン} 諾兒物件、^{ノールドウエエイゲン} ノールドウエイゲン、^{ノールエーゲン} ノールエーゲン、^{ノルウエーゲン} ノルウエーゲン

Zweden (Sweden) 雪際亞 Sulcia (外紀)

Danmark 第那瑪爾加 (外紀。全図：大泥亞 (Dania) 即第那瑪爾加)、^{デンマールケン} 弟那瑪爾加、^{デンマールケン} 弟那瑪兒加

Anglia (England) ^{エンガラント} 諾厄利亞 (全図)、暗厄利亞

Germania ^{ゼルマニア} 入爾・尔馬尼亞 (全図：入爾馬尼亞)

Francia 拂郎察 (全図)、佛蘭西 (?)

Parijs (Paris) ^{パリス/ぱいす} 把理斯 (外紀)、^{パレイヌ} 把列斯、^{パレーヌ/パリス/パレイヌ} 把里斯

Spanje (Spain) ^{イスパニア} 伊把泥亞 (?采覽異言。全図：以西把泥亞 Hispania)、^{スバニオン} 斯把泥亞、伊私把尼亞

Portugal ^{ポルトガル} 波尔杜瓦兒 (全図)

Italiaan (Italia) ^{イタリア} 意太里亞 (全図)

Rome ^{ローマ} 羅馬 Roma (外紀。全図：羅馬)

Venetie (Venice) ^{ヴェネチア} 勿擲祭亞 Venizia (外紀。全図：勿擲茶)

Sicilië (Sicily) ^{シ、リイン・セイリイン・セイリオン} 西齊里亞 Sicilia (全図)、^{セイリオン} 西里亞、^{セイリオン} 西齊利亞

Naples ^{ナポリ} 納波里 Napoli (外紀。全図：那波里)、^{ナポリア} 納波里亞

Grecia 厄勒祭亞 (外紀。全図：厄勒齊亞)、厄勒西亞

Candia ^{カンチーン} 甘的亞 (全図)、^{カンチア} 甘弟亞 かんじあ

Ukraine ^{ホンカレイン・ホンガレイン} 翁加里亞 (外紀。全図：翁阿利亞)

Polen (Poland) ^{ポウレン} 波魯泥亜（？全図：波羅泥亜 Polonia）

Russia 魯西亜（全図）、魯細亜

Moskou (Moscow) ^{モスコビア} 莫斯科末亜 Moscovia（外紀）、莫斯科、沒斯箇末亜、沒斯箇

Alps (Alpes) 牙而白山（外紀）

d アメリカ

Chili (Chile)（南）^{シリ} 智里（全図）

Peru ^{ペーリュ} 孛露（全図）

Brazilië (Brazil) ^{ぶらしる} 伯西兒（全図）

Cuba ^{クバ/キューバ} 古巴（全図）

Jamaica ^{ヤマイカ} 牙賣加（全図）、牙埋加

Mexico ^{メキシコ} 墨是哥、墨是古（？全図：墨是可）、

^{ノーハメキシコ} 新墨是哥

^{シンイスハニア} 新伊斯把泥亜（全図：新以西把你亜）

Canada ^{カナダ/カナダ} 加拿太（全図：加拿大）

II 薬名・人名

Theriaca 的里亜加（外紀）

Saffraan (Saffron) ^{サフラン} 雜腹蘭（外紀）

Balsem (Balsam) ^{バルセム} 拔爾撒摩（外紀。全図：巴尔婆摩）

Hippocrates 依卜加得（外紀）、ヒポクラテス、ヒッポカラテス、依卜加刺得斯、
依卜加得巴

全体からみれば、圧倒的な比例を占める訳語は地名である。アジア、アフリカ、ヨーロッパ、南北アメリカなど四大州の州名、特にアジア以外の地域名、都市名などが多く含まれている。また、少量の薬名、人名も見られる。

但し、蘭学者の面と向かい合うオランダ語は西ゲルマン語群に属し、リッチなどの宣教師の利用したラテン系の表記や発音は異なり、ずれが避けられない。従って、その漢字訳を利用しながら、フリカナでオランダ語の発音を記している。

1.4 新しい漢字音訳語

上述した内容から、伝統的な漢籍や漢訳西書などの訳語を継承している同時に、新しい音訳語が多く確認できる。『厚生新編』から見れば、おおよそ以下の数種類の訳語があると考えている。¹⁵

¹⁵ ここでは、既存の漢訳語の表記と文字が少々異なる訳語は漢訳の延長線に置かれているため、新造語とみなさない。全ての訳語を収集するわけではなく、現段階で明確にできる一部を挙げる。用

原語 (英語)	厚生新編	説明
地名		
Ieslaand, Island (Iceland)	^{エイスランド} 依斯蘭土、 ^{エイスランド} 依蘭土、エ・エ イスランド	
Ierland (Ireland)	^{イールランド} 依爾蘭土、 ^{イールランド} 意而蘭土	全図：喜百泥亜 Hibernia
Scotland	^{スコットランド} 私各多蘭土	全図：思可齊亜 Scotia
Duitsland	獨逸都、 ^{ドイツランド} 鐸乙都郎土、	全図：入爾馬泥亜 Germania
Amsterdam	^{アムステルダム} 亜謨/模斯的爾覃	
人名		
Galenus, Aelius 129-ca. 200	^{ガレニウス} 瓦列奴斯、ガレノス、ガレス ス	
Gorter, Johannes de 1689-1762	^{ゴルテル} 我爾徳兒	
Richerland, A. 1779-1840	^{リゼランド} 李撰蘭土	榕庵『利撰蘭度人身窮理書』：「利撰蘭度」
Linnaeus, Carolus 1707-1778	リンナアウス、リンナーウス、林娜斯、林娜私、リンネ	
Buys, Egbert ca. 1725-1769	^{ホイース} 勃乙斯	前野良沢『七曜直日考』：「勃逸志」
Alexander de Grote 356-323 BC	^{アレキサンデル} 亜歴山侄兒大王 アレキサン ドリヤ、アレキサンデル	亜力吉山的兒、あれきさん てる国
他		
Elektriciteit	^{エレキチイリテイト} 越列吉低力的乙多	電気
Klier	吉里鹿	『解体新書』：機里尔 (キリ イル[klier])
Alkali	アルカリ塩 (亜爾加里塩)	
Gas	瓦斯	

表の示したように、地名、人名のほかにも、物理学、化学、医学などに関する訳語が見られる。もちろん、これらの語彙は訳者の言語に基づき訳出したものである。

しかし、なぜ、このように表記するのであろうか。より具体的にいえば、恣意的に漢字表記をつけるのか、それとも、何れかの基準があるのか、不明である。

2 蘭学者の音訳探索

客観的にいえば、この膨大な蘭書には大量の音訳語があるが、理論的な説明は少ない。しかし、翻訳作業を開始した際に、訳者は少なからず音訳の問題に直面した。1811年の秋、馬場貞

例は必ずしも『厚生新編』が初見の訳語ではない。他の蘭学文献との繋がりを具体的な考証に俟つ。

由（1787-1822）と大槻玄沢（1757-1827）によって編纂された翻訳綱目の前書き「訳編初稿大意」に次のようにある。

和蘭は漢人の音譯字にしておらんだなり、此方にては阿蘭陀の字を用ゆ。原名は「オウランド」なり和蘭の音訳も下略なれとも、近期通称多きに従い、和蘭におらんだの假名附をなせり¹⁶

オランダ（Holland、現代中国語：「荷蘭」）という訳語の「原名」、つまり原語は「オウランド」であるが、「漢人の音訳字」は「和蘭」で、日本では「阿蘭陀の字」を用いる。「和蘭」も音訳であり、下の音「ド」（d）を略し、いわゆる「下略」をおこなっている。ここでは、訳者の「和蘭」という漢訳に従うこととし、「おらんだ」の仮名を付記する。

この訳語の源流、流布、行方のような具体的な諸問題については別論したいが、ここで反映された翻訳の方法を簡単に説明しておく。一言でいえば、オランダのような国家名であれば、日本語の用字があっても、通称となった漢訳に従っている。但し、日本語の読み方も仮名で表記されている。この点から言えば、『厚生新編』の訳校者は漢語音訳への尊重も日本語訳の自覚も持っているといえよう。

ところで、この百科事典の翻訳は江戸時代末期の作品であり、さして古い蘭学文献ではない。それ以前に成立した蘭学翻訳の中で、どのような位置づけであろうか。

オランダのルートを経由し、断片的に西洋文化を受容することは17世紀中期から開始される。成熟した蘭学作品を挙げるならば、1774年に刊行した『解体新書』であろう。出版の際、音訳について、玄沢の恩師として中心的訳者の一人である杉田玄白は以下のように論じる。

斯書所直譯〔音譯〕文字。皆取漢人所譯西洋諸國地名。而合諸和蘭萬國地圖相參勘。集以譯之。傍書倭訓。以便讀者也。一不用臆見也¹⁷

つまり、西洋各国の訳名はすべて漢訳を採用する。また、オランダの地図と比較対照しながら翻訳する。訳名の傍らに日本語の発音を付けることにする。従って、『厚生新編』のやりかたは貞由、玄沢の創造したものではなく、玄白からの引き継がれたものと考えられる。

では、音訳が作られていない場合は、蘭学者の取り方はどうであろうか。この点に関する玄白の論説は不詳である。しかし、この問題に触れた他の蘭学者がいる。その中で、玄白らとの交流を経て蘭医へと転向した津山藩（現、岡山県津山市）の医官宇田川玄随（1756-98）は以下のように述べている。

¹⁶ 貞松修藏編『厚生新編』、11頁。ショメール著、大槻玄沢 他訳『厚生新編』（第一冊）、11頁。また、これに類似する議論が、『紅毛雑話』（1787）（巻三「紅毛〔紅毛雑話總目：夷〕國の名」葉十二表）に記されている。

¹⁷ 杉田玄白『解体新書』、序図巻「凡例」、葉五裏。

又其直譯出漢人之手如雜腹蘭沒藥盧會的里亞加阿芙蓉舍利別之類。皆襲用焉。餘則據漢人譯例。新製之。¹⁸

即ち、漢訳のある音訳語を直接に襲用する。音訳語が無ければ「漢人訳例」に倣い、新しく翻訳する。

残念ながら、「漢人訳例」ということは未だ不明である。「訳例」について、玄沢は『蘭畹摘芳』（1798年成立）の中で、より明白に述べている。

西洋之譯。有直譯者。既有漢譯者。乃循其舊。若亡則填以所嘗傳之杭州音新譯定之。音韻之殊異。在其髣髴之間。¹⁹

つまり、漢訳があれば既存の訳語に従い、訳語がなければ、多くは杭州音を用い対応する。

新しい音訳語の漢字表記について、これ以前には長崎のオランダ通詞本木良永（1735-94）も論じている。

彼邦ノ語音ニ叶ヒ難シ、是ニ目テ唐通事、石崎次郎左衛門ニ、唐音ヲ学ビ、和蘭文字ノ語音ニ漢字ヲ合セ記スルナリ²⁰

つまり、ある唐通事に従い、唐音を学び、オランダ語文字の発音に漢字をつけることにした。この方法で、良永は一冊ほどの蘭漢字音対応表を作った。珍しい事でも必ずそっくりのものがある。玄沢の弟子の一人、橋本宗吉（1763-1836）は同じように論じている。

譯ニ對義直ノ三法アリ、皆先輩ノ則ニ依ル。先譯アルモノハ更ヘズ。偶予ガ新ニ直譯セシ所ノモノハ、唐音字ヲ以テ、コレヲ填ム。此字音ハ、和蘭譯官某ト支那譯官某ト相謀テ配音スル所ノ一冊子ニ依去スト雖、多クハ國字ヲ用ユ。²¹

宗吉の「直訳」、即ち、音訳がオランダ通詞（「和蘭訳官」）と唐通事（「支那訳官」）との協力によるパンフレートを参考にし、蘭漢字音の対応を作り出す。ただし、カナ（「国字」）は多く利用されている。一体、宗吉が何のパンフレートを参考にしたのか、良永の字音対応表であるかどうか、別論に俟つべきであるが、いわゆる唐音の採用の態度が伺える。

¹⁸ 宇田川玄随（1796）『西説内科撰要』、東都：須原屋市兵衛、卷一「凡例」、葉三裏。

¹⁹ 大槻玄沢（1817）『蘭畹摘芳』、江戸、大阪：須原屋茂兵衛 他、卷一「凡例」、葉一裏至葉二表。また、別の作品でも同様に扱われる。大槻玄沢（1826）『重訂解體新書』、序巻「舊刻解體新書凡例」、京都、大阪、江都：植村藤右衛門 他、葉六表裏。

²⁰ 本木良永（1793）『新制天地地球用法記』、第七冊「和解例言」（写本、早稲田大学図書館所蔵、年代不詳、1800年の序が見られる）。

²¹ 橋本宗吉（1813）「例言」、同編『三法方典』、浪華：河内屋太助、葉1表。句読点は筆者による。また、初版が1804年に刊行されたが、未見。

勿論、いわゆる「漢人訳例」について、異なる蘭学者にとって、必ずしも同じではないが、考え方はほぼ同一であると言える。つまり、音訳語をできるだけ漢訳と一致させるのである。上述した六か所の引用文を省み、対照して見れば、玄白以降、学者の間で次第に漢訳を参考した伝統は次第に形成していることが分かる。蘭学者にとって、それらの訳語は継承した漢訳のある音訳語と、訳例を参考にして「唐音」または「杭州音」に従い、創造した新訳語との二種類からなっている。

3 「杭州音」、「唐音」とは

以上の検討を通じ、漢訳語が継承・参照される考え方が明らかになったものの、事実上の扱い方は未だ不明のままである。いわゆる杭州音、唐音はいかなるものであるだろうか。

唐音とは、周知のように、鎌倉以降に日本へ輸入された中国の漢字音である。「唐」という漢字は王朝の唐ではなく、中国を表す語である。この名称の由来は満族支配の清王朝に抵抗した中国人が、「清の民ではない」ことを表明するために用いた「唐人」という自称に由来するとされる。²²研究によると、近世的唐音は、幾つのルートで伝来するが、中でも中心的と目されるのは、いわゆる黄檗唐音と長崎訳官（唐通事）に端を発する唐話である。²³その中で、唐通事は中国の主として南方の諸方言、漳州話、福州話、あるいは南京話、江南の呉語などに対応した。²⁴

本木良永は唐通事の助力を得て、唐音を利用し、音訳語を作成したことが前節の考察ですでに明らかにされた。具体的な扱い方としては、字音対応表に以下のように明確に記されている。²⁵

A 曷ア I 逸イ U 由ユ E 悦エ O 屋ヲ
 AA 阿アー II 以イー UU 猶ユ EE 野エー OO 窩ヲー
 AN 唵アン IN 因イン UN 由尹ユン EN 鹽エン ON 混ワン
 KA 割カ KI 竭キ KU 久キユ KE 缺ケ KO 箇コ
 GA 哈ハ GE 掘ゲ GI 及ギ GO 兀ゴ GU 救キユ
 SA 撒サ SE 設セ SI 濕シ SO 速ソ SU 濕由鳥シュー
 TA 蹋タ TI 的ティ TE 得テ TU 的由テユ TO 脱
 DA 沓タ DI 地ヂ、ディ DU 丟ジユ DE 迭デ DO 讀ド
 NA 納ナ NI 尼ニ NU 牛ニユ NE 捏子 NO 諾ノ

²² 奥村加代子（2007）『江戸時代の唐話に関する基礎研究』、吹田：関西大学出版部、3頁。

²³ 高松政雄（1986）『日本漢字音概論』、東京：株式会社風間書房、269頁。

²⁴ 岡田袈婆男（2006）『江戸異言語接触：蘭語・唐話と近代日本語』、東京：有限会社笠間書院、12、247頁。

²⁵ 本木良永「和解例言」の表（第七冊）から一部分を抜粋し、その順序を整理した。

HA 合ハ HI 飛ヒ HE 倏へ HU 飛由ヒユ HO 忽ホ
 MA 抹マ MI 密ミ MU 繆ミユ ME 脉メ MO 木モ
 IA 押(-) I 逸イ IU 由イユ IE 悦エ IO 郁ヨ
 RA 辣ラ RI カリ RU 力由リユ RE 列レ RO 緑ロ
 B 歩ブ C、K 郭ク D 掇ド F 桴フ G 古グ L 而 M 無ム N 尹ン P 甫 R 耳ル
 S 數ス T 鐸ト V 孚フ W 武ウ Y 以キ Z 世ズ

以上の字音は呉音、漢音を襲用するが、主に南方語の発音であると考えられる。従って、ここでいう唐音は、音韻を知らない筆者にとって判断し難いが、やはり南京官話と杭州音・浙江音を主とするのではないかと考えられる。²⁶その詳細については、今後の課題としたい。

一方、大槻玄沢の「填以所嘗傳之杭州音。新譯定之音韻之特異。在其髣髴之間」との言い方は曖昧であり、意を語り尽くしていない感がある。玄沢の利用した漢字音は、一体、どういったものであったのか、興味深い問題である。ここでは実例を考察することで、字音の問題を論じてみたい。

刊本『蘭畹摘芳』の目録に記されている訳語から見れば、音字の対応は以下のようなものである。

A 垂 I 乙 U 烏 JE 噎 O 阿、悪
 CA 加、蛤 K[I] 吉 GEN 硬 KO 歌(コー)、革、可
 SA 沙、鞞 SI 志、CI 悉 S 斯 CE 泄
 TAN 當 TI 的 DI 地 DE 牒 T 多
 NA 那、納 NE 涅 NO 諾(本文: 姥)
 PA 八 ?歇(へ) FIE 兮(ヒイ) VE 襪 PE 百 BOO 勃(ポー)
 MA 麻 MAN 忙 M 模
 LA 蠟 RAN 蘭 LI 力 RI 利 L 兒 R 爾 ?列(レイ) RO 羅

上記の対応からみれば、音訳の漢字は、確かに北京官話ではないが、方言学や音韻学の言う「杭州音」ではないように考えられる。玄沢の「杭州音」というのは、広く「南方音」あるいは呉語の影響を受けた音と考えるほうが適当であろう。

二人の論者の生活環境を考えに入れば、蘭学者の語音、殊に中国語の音韻素養がそれほど高くない推測できる。良永は長崎で蘭通詞を担当しているから、来日の中国人との付き合いがあると考えられるが、生涯をかけて、オランダ語(訳)を務め、中国語への関心が有っても、その努力の限界が想像できる。一方、漢学・漢文に造詣が深い玄沢は、長年にわたり、仙台、江戸などの地方に滞在し、中国語母語話者との付き合いが少なく、中国語に対する音声・音韻を

²⁶ 高松政雄『日本漢字音概論』、269-70頁。

聞きわける耳の力は必ず弱いと言い難いが、それほど高くないと考えられる。従って、唐音、杭州音のような言い方は必ずしも厳密的な概念ではないと考えている。

唐音研究の先学によると、江戸時代の唐音関係資料に、唐音は一樣ではなく複数の物があるとわかる。より早く出来た長崎学者西川如見（1648-1724）の『華夷通商考』（1695）では十五省の言語についての説明があり、江戸儒学者新井白石（1657-1725）の『東音譜』（1719）では杭州・泉州・漳州・福州の音を示している。さらに、朝岡春睡（生卒未詳）の『四書唐音弁』（1722）、太宰春台（1680-1747）の弟子としての僧侶文雄（1700-1763）の『磨光韻鏡』（1744）、『三音正譌』（1752）などの作品は方音差を示した資料があり、特に文雄の二資料を併用すれば、当時の方言はかなり分かるわけであると思われる。²⁷意味深い点は、文雄が前者の中で唐音は杭州音を示したものと見られているが、²⁸後者の官話と正音の対立はそれほど違わないと考えられる。²⁹専門の研究者がこのようであるから、彼らの研究成果に依頼した蘭学者の唐音あるいは杭州音には一致性が欠いたのは当然であろう。

注意すべき点は、それらの漢字はまれにしか見ない文字であると思われる。これは、沈氏の指摘したように、蘭学者は専用の漢字表記を以て、用字の意味の影響を回避することが分かったが、³⁰発音、記憶ないし使用の難度を増やすではないかと考えている。

4 結語にかえて：漢字音訳の影響

表音文字としての蘭語を音訳した際、漢字表記を利用することは、蘭学者の漢訳語の継承または漢字依頼が伺えるが、回避できない問題もある。各種類の漢字音訳が同時に出来、不正解或いは不統一のイメージが強く感じられる。また、用字の意味をもたらす可能性が高く、カナより難しいので、理解・普及の困難を増加させられると思われる。

しかし、これらの問題によって、漢字訳全般を否定し、その役割を無視するのは客観的な認識に達成できない。少なくとも、漢籍、特に漢訳西書の訳語の継承を通じ、知識の伝承を確保できると言える。この上に、漢字が意味の完全性・一貫性、使用の融通性などの特徴を持っているので、長い目で見れば、漢字訳は広範に利用できる。

漢字訳は当時の蘭学者たちに広く継承・利用されていたが、現代的視点から考えると、具体的な言葉によって、その影響は随分と違ってしまう。

一般的な漢籍にみられる訳語の中で、「阿芙蓉」（「阿片」）、「阿魏」、「葡萄」、「没薬」、「檳榔」、「爪哇」、「暹羅」のような植物（薬）名、地名はいち早く訳出され、蘭学

²⁷ 岡島昭浩（1987）「近世唐音の重層性」、『語文研究』第63号、36-37頁。

²⁸ 沖森卓也（2011）『日本の漢字 1600年の歴史』、東京：ベレ出版、260頁。岡島昭浩「近世唐音の重層性」、36頁。

²⁹ 岡島昭浩「近世唐音の重層性」、37頁。

³⁰ 沈国威『近代中日词汇交流研究：汉字新词的创制、受容与共享』、84頁。

以前に既に日本へ伝来・定着し、今日でも使用されているから、改めて論じる必要はない。一方、「波斯」、「印度」などのアジアの訳語は、漢訳西書の音訳「百爾西亜」、「應帝亜」（「印弟亜」）と併用され、一時は併存したが、結局は元来の表記で定着した。「錫蘭」という漢訳はアラビア語「Silan」に由来するが、ヨーロッパでは「Ceylon」と称されるので、蘭学者がアレーニの「則意蘭」という表記を採用し、「セイロン」の発音を漢訳に付すこととなった。

漢訳西書について、注意すべき点はそれらの漢訳と蘭学者の翻訳したオランダ語名との間にずれがあるということである。その不一致に対して、蘭学者は漢訳語の上にフリガナをつけるといった努力が見られる。にもかかわらず、多くの個所で漢訳西書の影響が見られる。まず、「亜細亜」、「欧羅巴」、「亜刺比亜」、「羅馬」などの訳語は後世に継承され、定着していく。また、「亜墨利加」、「亜弗利加」、「魯西亞」、「意太里亜」のような多くの訳語は部分的に用字が改められ、受容したのみならず、対応する読み方は今日でも使用されている。

新語の影響について、量的統計がないが、確かに「独逸都」、「瓦斯」、「亜爾加里塩」のような、従来使用された音訳語が確認できる。もちろん、これらの漢字表記は今日では、さほど使用されないが、カナに書き換えられ、引き続き利用されている。

確かに、仮名より、漢字の方が難しいのみならず、用字の意味をもたらす可能性も高いが、意味の完全性などの特徴があるので、「欧羅巴」を「欧」と、「独逸都」を二字の「独逸」または単字の「独」と簡略で使われるだけでなく、ほかの漢字と連用し、「欧州」、「独国」、「日欧」、「日独」などのことばが作られるように、漢字訳は簡潔明瞭な意味を持ち、利用しやすい。この視角から見れば、漢字音訳語の生命力を重要視しなければならぬ。

後記：拙文は2016年3月22日（土）上海東華大学で行われた国際シンポジウム「東アジア言語の接触研究」における誌上発表の内容を加筆したものである。執筆中、沈国威教授、内田慶市教授、二ノ宮聡博士、王麗娟博士よりご指導を賜った。感謝のことばをさし上げたい。

参考文献

史料

李時珍（1596）《本草綱目》，金陵：胡承龍（国立国会図書館&Library of Congress）。

刘衡如、刘山永校注（1998）《本草綱目》（上下册），北京：华夏出版社。

利瑪竇編（1602）《坤輿萬國全圖》（James Ford Bell Library at the University of Minnesota）

1604（？）年版（東北大学附属図書館狩野文庫画像DB）

艾儒略増譯、楊廷筠彙記（1623）《職方外紀》（刊本、二冊六卷、出版情報未詳、早稲田大学図書館所蔵。）

艾儒略原著、謝方校釋（1996）《職方外紀校釋》，北京：中華書局。

朱震亨（1347）『局方發揮』（1627年刊行、出版情報未詳、早稲田大学図書館所蔵）。

西川如見（1695）『華夷通商考』（二卷）、洛陽：甘節堂、學梁軒（梅村弥右衛門、古川三郎兵衛）。

新井白石（1713）『采覧異言』（1820年写本、早稲田大学図書館所蔵）

〃（1719）「東音譜」、大田南畝輯（1791）『難船紀聞・東音譜』（写本、早稲田大学図書館所蔵）。

〃著、大槻文彦校（1881）『采覧異言』、東京：白石社。

〃著、箕作秋坪、大槻文彦校（1882）『西洋紀聞』、東京：白石社。

朝岡春睡（1722）『四書唐音辨』（二卷）、江戸：板木屋勘兵衛（未確認）。

文雄（1744）『磨光韻鏡』（二卷）、皇都：八幡屋四郎兵衛。

〃（1752）『三音正譌』（二卷）、平安：柳田三郎兵衛。

杉田玄白（1774）『解體新書』（五卷）、東武：須原屋市兵衛。

森嶋中良（1787）『紅毛雑話』（五卷）、東都：須原屋市兵衛。

前野良沢（1792）『七曜直日考』（写本、早稲田大学図書館所蔵）

本木良永（1793）『新制天地二球用法記』（写本、早稲田大学図書館所蔵）。

宇田川玄随（1796）『西説内科撰要』（卷十二）、東都、須原屋市兵衛（早稲田大学図書館所蔵）。

山村才助校訂（1804）『訂正増譯采覧異言』（写本、卷1-7&12、国立国会図書館所蔵）

橋本宗吉（1813）『三法方典』（六卷）、浪華：河内屋太助。（江戸科学古典叢書26、東京：恒和出版、1980年。）

大槻玄澤（1817）『蘭畹摘芳』（初編三卷）、江戸、大阪：須原屋茂兵衛、須原伊八、河内屋義助、河内屋太助（Google Books）。

〃（1826）『重訂解體新書』（十四卷）、京都、大阪、江都：植村藤右衛門、鉛屋安右衛門、秋田屋太右衛門、須原屋市兵衛（京都大学附属図書館所蔵）。

貞松修藏編（1937）『厚生新編』、静岡：厚生新編刊行會。

馬歡著、馮承鈞校注（1955）《瀛涯勝覽校注》，北京：中華書局股份有限公司。

王有立主編（1968）『皇明象胥錄・四夷考』、台灣：華文書局。

シヨメール著、馬場貞由、大槻玄澤 他譯（1978-79）『厚生新編：静岡県立中央図書館蔵』（五冊、索引）、東京：株式会社恒和出版。

趙汝适原著、楊博文校釋（1996）《諸蕃志校釋》，北京：中華書局。

宇田川榕菴訳『利撰蘭度人身窮理書』（写本、年代未詳、早稲田大学図書館所蔵）。

中國哲學書電子化計劃 <http://ctext.org/>

維基文庫 <https://zh.wikisource.org/>

研究書・論文

中村久四郎（1928）『支那語中の西洋語：近世支那傳來西洋語漢字音譯語彙』（東亞研究講座第二十輯）、〔東京：〕東亞研究會。

板沢武雄（1958）「蘭学發達の基盤及び契機としての漢学」、『法政史学』第11号、1-12頁。

- 能美徹 (1961) 「外国固有名詞の漢字音訳について」、『北九州大学開学十五周年記念論文集』(外国文学・語学篇)、279-97頁。
- 岡田袈裟男 (1978) 「『和蘭字彙』とその音訳語の考察」、『国文学研究』第64巻、83-93頁。
- 〃 (2006) 『江戸異言語接触：蘭語・唐話と近代日本語』、東京：有限会社笠間書院。
- 高松政雄 (1986) 『日本漢字音概論』、東京：株式会社風間書房。
- 岡島昭浩 (1987) 「近世唐音の重層性」、『語文研究』第63号、36-50頁。
- 王敏東 (1992) 「外国地名の漢字表記をめぐって：『オーストラリア』を中心に」、『待兼山論叢・文学篇』第26号、17-39頁。
- 〃 (1992) 「外国地名の漢字表記について、『アフリカ』を中心に」、『語文』第58輯、12-33頁。
- 〃 (1994) 『外国地名の漢字表記についての通時的研究』、大阪大学文学研究科博士論文。
- Masini, Federico. (1993). The Formation of Modern Chinese Lexicon and Its Evolution toward a National Language: The Period from 1840 to 1898, the Monograph No. 6 of *Journal of Chinese Linguistics*.
- Liu, Lydia H. (1995). *Translingual Practice: Literature, National Culture, and Translated Modernity--China, 1900-1937*, Stanford: Stanford University Press.
- 荒川清秀 (1997) 『近代日中学術用語の形成と伝播：地理学用語を中心に』、東京：白帝社。
- 杉本つとむ (1998) 『杉本つとむ著作選集2：近代日本語の成立と発展』、東京：八坂書房。
- 孫建軍 (2003) 『日本語彙の近代：幕末維新期新漢語の成立に見られた漢訳洋書の影響』、国際基督教大学大学院比較文化研究科博士論文。
- 〃 (2004) 「『ロシア』という漢字表記の成立」、飛田良文 他編『アジアにおける異文化交流』、東京：明治書院、84-98頁。
- 〃 (2015) 『近代日本語の起源：幕末明治初期につくられた新漢語』、東京：早稲田大学出版部。
- 奥村加代子 (2007) 『江戸時代の唐話に関する基礎研究』、吹田：関西大学出版部。
- 千葉謙悟 (2010) 『中国語における東西言語文化交流：近代翻訳語の創造と伝播』、東京：株式会社三省堂。
- 沈国威 (2010) 《近代中日词汇交流研究：汉字新词的创制、受容与共享》、北京：中华书局。
- 沖森卓也 (2011) 『日本の漢字 1600年の歴史』、東京：ベレ出版、260頁。
- 吉野政治 (2014) 「蘭書三訳法の起源とその名称」、『同志社女子大学日本語日本文学』第26号、41-57頁。